

## 1 はじめに

平成30年3月24日、硫黄島に渡島硫黄島戦「七十三周年記念日米硫黄島戦没者合同慰霊追悼顕彰式」に参列した。

この祭典は日米の硫黄島協会共催である。引き続き日本側別個の「天山硫黄島戦没者慰霊追悼顕彰式」に参列。最後に島内戦跡を巡拝し離島した。滞留半日余であった。日米協会は夫々復員軍人生存者・遺族・退役軍人たちで構成されている。

「承知のごとく硫黄島戦（米作戦名 Operation Detachment）は大東亜戦争中最大といわれる苛酷な戦闘であった。昭和20年2月19日から3月26日までの戦いで、日本側戦没兵士は、総兵力2万1千名中2万名、対する米軍は総兵力11万名中、上陸兵士6万名、戦死傷兵士3万名であった。

昭和60年、両国硫黄島協会はこれら両国兵士たちの尊い犠牲を合同で慰霊追悼顕彰するため「名誉の再会（Reunion of Honor）」を果し、「日米再会記念碑」を建立した。平成7年、両協会

はこの「名誉の再会」祭典を10年振りに斎行した。以後23年間、中断もあつたが合同祭典は近年、我が国から国会議員も参列し斎行されている。

本年度の日本側参列者は凡そ90名、最高齢は99歳の遺族未亡人であった。米国側のそれは50名を超えていたが、中に海兵隊復員元兵士8歳が本国から飛来していた。祭典従事の両国部隊兵士を含むと、300名程を収容するテント群が晴天下の海風にはためく会場であった。

新藤義孝遺族代表が「追悼のごとば」で触れた、平成6年2月12日の天皇皇后両陛下下の硫黄島行幸啓は、戦没将兵の御魂の存在を想起させた。

硫黄島は火山島で水がなく、将兵は水不足に苦しめられた。

筆者は、予め靖國神社から聖酒聖水を拝領、更に富士山天然清水を背囊に背負い、記念碑その他要所に献酒献水してきた。島にあること半日、離島まで落涙滂沱たるものがあつた。

## 2 祭典

## ① 「日米再会記念碑」に於ける

## 合同祭典式次第

式前演奏（陸上自衛隊中央音楽隊・米國第3海兵機動展開部隊軍楽隊）開会

起立（米軍楽隊）

日米国旗・軍旗入場（日米軍楽隊）

日米国歌斉唱（日米軍楽隊）

米海軍従軍牧師祈りのことば

日本側追悼のことば（硫黄島協会長以下6名）

米国側追悼のことば（米国硫黄島協会議長以下2名）

日本側献花・献水（日音楽隊）

米国側献花（米軍楽隊）

鎮魂歌（日米軍楽隊）

黙祷

鎮魂ラップ（日米軍楽隊）

日米国旗・軍旗退場（日米軍楽隊）

閉会

## ② 「天山慰霊碑」に於ける祭典式次第

開会

君が代斉唱（陸自音楽隊）

平和の祈りを黙祷（陸音）

追悼のことば（協会会長以下4名）

献花・玉串奉奠・献水（陸音）

鎮魂歌（陸音）

平和観音讃仰歌斉唱（陸音）

閉会

日米ともに、戦没兵士への慰霊追悼顕彰の祈りが、己が祖国の歴史、伝統、文化、慣習、信仰を離れることはあり得ない。

そこで、米海軍従軍牧師は「参列者は夫々の伝統に則り祈りを捧げるよう」(I now invite you to pray in your tradition as I now pray in mine.)と前置きした上で、「再会碑」に於ける合同祭典の「祈りのことば」を捧げた。

その祈りは、戦没両国兵士の靈魂の安寧と、嘗ての敵同士が築きつゝある平和に、唯一絶対神の加護を願ひ、アーメンと結ぶものであつた。牧師の前置きは参列者の夫々の信仰を正面から受容しており、皆、従軍牧師の祈りの言葉に重ね、真剣に己が伝統に則り篤い祈りを捧げた。

次いで日本側硫黄島協会長以下6名、米国側協会議長以下2名の「追悼のことば」が続いた。日本側の「ことば」の概要は、熾烈を極めた戦いに祖国のため勇戦奮闘、命を捧げた戦没将兵と遺族を慰める慰霊追悼と、これが戦後73年の平和と繁栄の基となつたことを顕彰するものであつた。

米国側の「ことば」は、73年前、敵国の戦士として出会つた若者たちが凄惨を極めた戦いに流した血が、時間を紡いで今日の硫黄島を聖なる土地とし、両国の友好関係を築いている。これを更に強固なものにするため、慰霊追悼祭を有効に続けねばならない、と結ばれた。これらに日本側の献花・献水、米国側の献花が続いた。

「天山碑」での「平和の祈り」は陸自音楽隊の荘重な演奏を言葉代りにしての黙祷であった。次いで協会長、遺族代表、2大臣（防衛、厚労）の「追悼のことば」で慰霊追悼顕彰（合同祭典と同内容）の意が陳べられた。

続いて献花、玉串奉奠と献水が斎行され、平和観音讃仰歌を斉唱した。1時間を優に越す間、祭典に漲っていたのは戦没将兵の御魂よ安らかに鎮もりませと乞い願う全参列者の厳肅な祈りであった。強風にはためくテントの下で、玉串奉奠・献水を済ませた人、これからの順番を待つ人、ともにあらぬ身動きをする姿はどこにも見られなかったのが、そのことを語っていた。



君が代



星条旗

二つの式次第を一見して直ぐ目につくことは、式次第のほとんどが音楽隊演奏を伴い斎行されていることである。実際に祭典場に響く音楽隊の吹奏・鼓打の音色と力強さは、戦没将兵の御魂を真摯に大きく揺さぶる感に充ちるものであった。

合同祭典は日米両硫黄島協会員と協会賛同者参列のもと、陸海空自衛隊・米海兵隊の参加と支援のもとに斎行された。従って、事実上軍主催とも云い得る戦没将兵の慰霊追悼顕彰祭典における音楽隊演奏が全参列者の心に沁み透り、その心が篤い慰霊追悼顕彰の念に昇華したことは次の情景に明らかであった。

即ち、合同祭典の進行中、参列者の中に有らぬ私語、脇見、足を組む、無関心気に姿勢を崩す人の姿は式場のどこにも見られなかった。80分にも及んだ合同祭典のどの1分1秒にも、日米全参列者の戦没者への慰霊追悼顕彰の篤い祈りが込められていた証しである。正に「祭神如神在」（「論語」）の情景であった。

日本側参列者だけで斎行の皇軍戦没将兵軍属を祀る「天山碑」祭典もまた、同様の真摯さで包まれていた。

### 3 戦跡巡拝

#### 戦場活動の壕に入って

「再会碑」「天山碑」祭典後、日本側参列者は栗林司令官壕、医务科壕、歩兵、砲兵、工兵、通信各大隊壕、機関銃掩体、砲台、戦史に残る会戦跡、墓地等等と戦跡を巡拝した。

各戦跡には「某々大隊壕跡」などの碑柱が立てられ、壕には入れなかったが参列者はその碑に献水できた。身内の所属大隊壕碑に馳せ寄った遺族が献水しては碑を撫で擦り、ハンカチを目に当てる姿は、見る者の背筋を正すものがあつた。

ルート中で大阪山砲台下の壕には、入口付近から壕内最初の分岐路までは入ることが許された。電燈が配線されていたが、往時唯一の照明は換気通風

を兼ねた細い筋穴からの光に頼っていた兵士たちの戦場活動を思うと、電燈の明かるさで見る壕内体験だけでも胸は絞めつけられた。

実際壕内に立つと、73年前に「九段の桜の下で逢おう」（英霊たちの言の葉『靖国神社編』）と言ひ交し、戦線に向かった兵士たちが踏みしめた足もとの砂が肌を震わせるのである。その緊張感に声にならぬ声がお、と言ふ。

高熱と湿気に曝されながら、出撃、退避、武器整備、弾薬確認、攻撃演練、命令伝達、索敵・敵状報告、見張りなどの戦闘準備、食事、傷病助け合い、種々の生活雑事、交代休息などの壕内活動はどんなものであつたのか。

「天山碑」祭典で、「栗林大將は麾下に向けて最後の戦闘の前に、祖国がこの戦いの勲功を讃える日が必ず来ると訓示」（新藤義孝「追悼のことば」）「戦没将兵あつて、今日我々が享受している平和と繁栄がある」（加藤勝信厚労相「ことば」）を拝聴した。

その「ことば」を心に反芻しながら壕内に立ち、天井や壁の掘削手仕事の跡に驚き圧倒されている時、口中呟いたのは「有難うございます」の繰り返り返りであった。

### 4 日米苛烈な戦闘と「名誉の再会」

慰霊追悼顕彰する硫黄島戦日米戦没

將兵の御魂とは何か。その御魂、戦いに捧げた尊い命のザイン（存在）を、戦の数字を通して把握してみたい。その再会」にアウフヘーベン（昇華）したことが理解できる。

硫黄島戦は昭和20年2月19日、小笠原兵団長栗林忠道陸軍中将（当時）以下2万1千名の皇軍將兵が守備する島へ、R・K・ターナー海軍中将麾下の海軍・海兵隊將兵11万名中、第3海兵師団を主力とした海兵6万名が上陸、一カ月余を経た3月26日制圧した。皇軍側戦没者2万名、米軍側戦死傷者3万名。硫黄島戦は大東亜戦争中米軍戦死傷者が唯一日本軍のそれを上回った戦いである。硫黄島戦は米軍には想像も付きかねる苛烈極まる戦闘であった。

硫黄島戦8カ月前のサイパン島戦での日米戦没兵士数は4万名（民間人1万を含む）対3千4百名であった。参謀本部はこの戦訓を基に対米上陸作戦を水際直接配備による水際撃滅思想から縦深配備による沿岸撃滅思想へと、より実際に則した教義・戦術に転換した。

その結果、硫黄島戦5カ月前のペリリュー島戦では縦深配備の陣地を重掩蓋化し、日米戦死傷者を同数の1万1千名とした。硫黄島戦は縦深配備を更

に洞窟化した結果、日米戦死傷者比は2対3と逆転し、米側が1万多名多くなった（「大東亜戦争戦史叢書」他）。

硫黄島上陸作戦開始を控えた記者会見で、指揮官日・スミス中将は「攻略予定は5日間、死傷兵は1万5千名を覚悟している」と述べていた。この予測は前述の数字に見る通り、その時点では科学的戦闘要領判断に基づいていた。しかし、実際の上陸作戦では、米軍戦死傷者数が、日本軍のそれを1万名上回ったのである。

その苛烈な硫黄島戦の敵同士が昭和60年2月19日「名譽の再会」を果たした。互いに苛烈極まる戦いを体験した「再会」は敵愾心の炎上ではなく、40年の歳月を経て互いの死闘を敬う「名譽」にアウフヘーベンしたのである。合同祭典で米硫黄島協会幹部会議長N・スミス海兵隊退役中將は、戦後40年目に敵同士の「名譽の再会」が果たされた所以を「追悼のことば」で紹介した。

「米国硫黄島協会元名誉会長L・スノーデン海兵隊退役中將（硫黄島戦で大尉）には、凄惨と同時に神聖であった硫黄島戦の敵同士の和解が、永続的な平和を築くとの認識があった。その認識が結実した結果である」と。こゝに見る戦いを「神聖」(hallowed)と形容する単語は、当然、戦った兵士の「名譽」(honor)を含蓄する。

日米敵同士が合同で戦没將兵の慰霊追悼顕彰祭を斎行するのは、大東亜戦争の戦場で硫黄島「名譽の再会」祭典のみである（新藤「ことば」）。この「名譽の再会」祭典には賛同グループがあり、今回は20名の賛同者が参列し、内3名は靖國神社の神職であった。

## 5 日米硫黄島協会

日本硫黄島協会は昭和28年6月に結成された。設立の趣旨は戦没將兵の慰霊追悼顕彰とご遺骨の祖国帰還促進である。初代会長は和智恒藏元海軍大佐であった。氏は戦後、天台宗僧侶となり戦友の慰霊追悼及び、遺骨収容と祖国帰還の奉仕に生涯を捧げた。現会長寺本鐵朗氏は5代目に当り、歴代会長は復員軍人またはご遺族がその任を務めた。

アメリカ硫黄島協会（IJA）初代プレジデントは、L・スノーデン海兵隊退役中將であった。米協会構成員、設立目的は日本側協会のそれに平和への貢献が付される。

平成30年2月17日、ワシントンDCで故スノーデン中將の功績を称えて新設された「平和・和解賞」授賞式があり、第一回受賞の栄は栗林忠道大將御令孫新藤義孝衆議院議員に与えられた。

## 戦没將兵の御魂

天山祭典「ことば」の中で新藤遺族代表は、平成6年の天皇后兩陛下の硫黄島行幸啓に、改めて深い感謝の意を表した。この兩陛下下の「天山碑」への行幸啓は、翌年の「名譽の再会」合同祭典再開に弾みを与えたと思うが、研究課題も含んでいた。

天皇后陛下の小笠原諸島行幸は、先帝陛下の昭和2年父島行幸以来、実に67年振りのことであった。硫黄島へは今上陛下が初めてである。氏はその折の御製、

精魂を込め戦ひし人未だ  
地下に眠りて島は悲しき

を再誦した。その上で氏は、現在の平和と繁栄が、貴い英霊の犠牲の上に成り立っていることを心に刻み、「未だ地下に眠りて」と御製が悲しまれた1万1千名のご遺骨に帰郷して頂く活動を続けて行く、と述べた。

氏が兩陛下下の硫黄島行幸啓に言及されたのを耳にした時、四半世紀前、皇后陛下の失語症が行啓の最中に「皇さま、声、全快」（『読売紙』平6・2・13東京朝刊）を知り、漠然とこの記事は霊魂の存在を実証しているのではないかと考えたのを不意に思い出した。こんな考えが浮かぶなどは、天山

祭典の厳肅な齋行に参列し、戦没将兵の御魂の存在を心身で受け止めていたからだ、と言い得る。

天皇皇后両陛下が硫黄島、父島、母島に行幸啓されたのは平成6年2月12日から14日に亘った。当時、皇后陛下には失語症の症状が窺われた。

今上陛下は御即位以来、国内外併せて11回の戦没者慰霊追悼に行幸されている。皇后陛下はその全てに文字通り今上陛下に寄り添われて行啓され、失語症にも拘らず硫黄島行啓もお取り止めにはならなかった。

しかるにこの行啓中、皇后陛下の失語症は突然本復なさったのである。12日午後、両陛下は「天山碑」に献花、献水され、畏くも戦没将兵の御魂の冥福を祈られた後、島内北半分を巡礼され、墓地公園内「旧硫黄島民戦没者の碑」、鎮魂の丘「鎮魂の碑」に拝礼された。

その後、関係4団体の代表と懇談された際、皇后陛下は石井金守東京都遺族連合会長に「遺族の方々は、みなさん元気にやっておられますか」とお尋ねになられた。4人の代表は「きれいなよく聞こえる声で、すっかり元通りになられたご様子だった」と口々に話していた（『読売紙』前同）と三言う。

行啓に伴う御歌は、

銀ネムの木木茂りゐるこのしまに  
五十年眠るみ魂かなしき

である。新藤氏「ことば」が両陛下の硫黄島行幸啓に言及されたのを耳にし、皇后陛下のご回復は祈りと御魂の往来を実証しているのではないかと、四半世紀も前にふと考えたことを思い出すくらい「再会碑」「天山碑」祭典の厳肅さは我身をおおっていた。

### 7 まとめ

この拙文は「七十三周年記念日米硫黄島戦没者慰霊追悼顕彰式」参列報告で、以下はその補注である。

祭典の式次第に於ける陸自音楽隊・米海兵軍楽隊の演奏ぶりに触れ、「七十三周年日米硫黄島戦没者合同慰霊追悼顕彰式」の祈りが軍楽隊の力強い演奏を伴い、両国戦没将兵の御魂に深く届いた様子を述べた。これに若干補足しておきたい。

拡声器などない時代の軍隊と吹奏・打楽器の紐帯ぶりを一書に瞥見してみただが、その絆の太さは古近一貫している。即ち、古代近代の軍隊の中では、吹奏・鼓打の響きは兵士の日常生活の一進一退に鳴りわたり、団体精神を鼓舞していた。

また、近世、欧州の戦場に於いて突

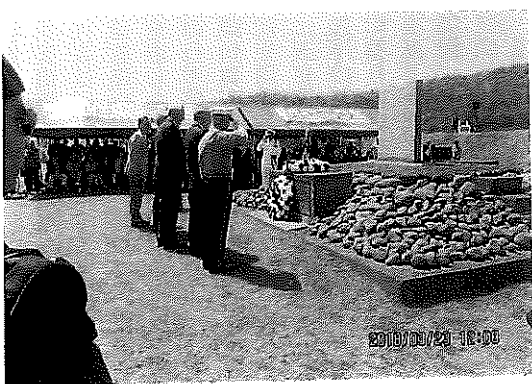
撃する歩兵大隊の大隊長に随身して、大隊に突撃・前進・後退の命令を下す戦闘技術として、楽手・鼓手隊が配置されていた。軍楽隊も亦、楽器を武器に、銃を持つ兵士と生死を共にする戦友であったのである。その命を賭けた楽器の響きは、より力強く将兵の血を沸き立たせ、敵には恐怖心を起こさせ

た（『戦闘技術の歴史4』創元社）。軍隊と軍楽は切り離せない。合同祭典で軍楽隊演奏が戦没将兵の御魂に深く届いたと見えた一半の理由がこゝに在りはせぬか。

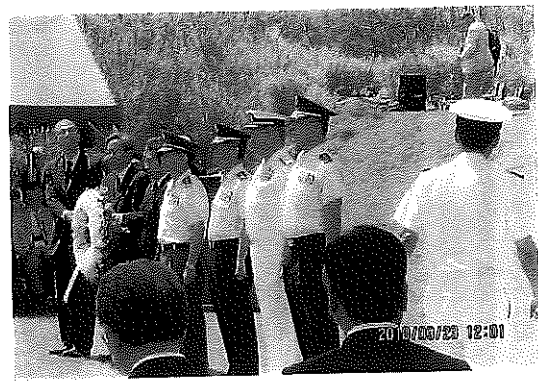
ところで、式次第所作の中に、米側には献水がなかった。この献水作法の有無は、水の不自由など更になかった米軍と、渇水に喘いだ皇軍の苦戦であつたことを思わせるものがあつた。それあつてか、日本側参列者の献水所作には深い慰霊の心が顯れていた。

日本人の神観念は「其余何人にまれ、尋常ならずすぐれたる戦功ありて、可畏き兵を神とは云ふなり」（『古事記伝』敷衍）ではないか。日本人参列者はこの神観念そのままに戦没者の御魂に献水した筈で、それが所作の真摯さを見せていたと思う。

大阪山砲台下の壕内に立った時、眩しい言葉は「有難うございます」であつたと述べた。手を合せた所作を文字に



献花



献花・献水

すれば慰霊追悼顕彰ではあるが、一  
図に感謝の気持ちを表したかった。

昭和20年3月17日、硫黄島戦最後の  
関頭に立った栗林中将の参謀本部に宛  
てた訣別電は、最早や徒手空拳で戦う  
しかない戦況を、「国守る重き務めを  
果たし得て、矢弾尽き果て散るぞ悲し  
き」と詠う。一方で死地に立ち向う塵  
下兵士には、祖国がこの戦いの勲功を  
讃える日が必ず来ると訓示している  
(新藤「ことば」)。戦後73年の歴史は  
その通りになった。

「再会碑」を前に寺本鐵朗硫黄島協  
会長は「今日我々が享受する平和と繁  
栄は、それぞれ祖国、郷土そして家族  
を愛する勇敢な戦士たちの尊い犠牲と  
日米両国民のたゆまぬ努力の上に成り  
立ったことも忘れてはならないもの」  
(「ことば」と述べた。

両氏の「ことば」を拝聴し、納得の  
思いで緊張感に身を引き締め、壕内に  
立った。そこで一瞬壕奥に戦没将兵の  
ザインを感じ、73年前の兵士たちの息  
吹きが耳を打ったかと疑った時、反射  
的に「有難うございます」が口に出た。

世界戦史は、凡そ兵力の3分の1を  
喪失した時点で、軍の組織的戦闘能力  
は激減すると大まかに語っている。し  
かるに、大東亜戦争中最大の激戦地で  
あった硫黄島戦では、2万1千余名の

皇軍兵士が守備する島へ上陸進撃した  
米海兵隊兵士6万名中、戦死傷者は  
3万名に達した。この上陸作戦は米軍  
には想像も及ばなかった熾烈な戦闘で  
あった。

その数字があつて、米協会議長N・  
スミス中将が紹介した初代会長L・ス  
ノーデン中将の認識「凄惨」には想像  
を絶した戦闘、「神聖」には互いに死  
力を尽くしあつた彼我への敬意が読み  
取れる。こゝには硫黄島戦が、ラグビー  
競技テストマッチに於けるノーサイド  
の発想に似た、互いの敬意に昇華する  
ほど熾烈な戦闘であつた証拠だろう。

米硫黄島協会は本年2月に新設した  
第1回「平和・和解賞」を、栗林忠道  
大将御令孫新藤義孝氏に授与した。  
こゝには「名誉の再会」に込められた  
日米両国の戦没者慰霊追悼顕彰の意図  
の揺るぎない真剣さと、それを守り抜  
いて行く固い決意が表れている。

皇后陛下は平成5年10月20日のお誕  
生記念日に心因性失語症に罹られ、疾  
病を押して硫黄島に行啓された平成6  
年2月12日、戦没将兵慰霊追悼の最中  
に全快された。

皇后陛下はお言葉を口に出来なくて  
も迷わず今上陛下の行幸に「一緒され  
たお気持ちで、同年のお誕生記念日に

述べていらつしやる。宮内記者会前以  
ての「目指す皇室像は」の質問に、「私  
の目指す皇室像というものはありませ  
ん。ただ、陛下のおそばにあつて、す  
べてを善かれと折り続ける者でありた  
いと願っています」(「あゆみ」海竜社)  
と文書回答されたのである。

このお言葉には皇后陛下の戦没将兵  
慰霊追悼顕彰のお祈りの貴さ篤さを語  
り切つて余すところがない。国母の失  
語症が心因性ならば、その心因を解し  
たのは、国母ご自身の貴く篤い祈りが  
戦没将兵の御魂に真直に届いたからで  
はないか、と改めて考えている。

本稿執筆に当り、脳裡に「国母之尊  
崇ニ依リテ、戦没将兵之靈威ヲ増ス」  
(「倭姫命世記」敷衍)の連想に飛んだ  
ことを記したとて、牽強の難に当るで  
あろうか。不敬を恐れながらの付言の  
所以である。

73年前以前に「国憲ヲ重シ国法ニ遵  
ヒ一旦緩急アレハ義勇公ニ奉シ」(「教  
育勅語」)られた大東亜戦争戦没将兵・  
官・民のいらしたと、昭和20年8  
月15日を境に平和と繁栄の現代史があ  
ることを切り離して考えることはでき  
ない。昭和前期の戦没将兵・官・民へ  
の慰霊追悼顕彰は、平成の今に欠かせ  
ぬ祈りである。

「英霊に敬意を。日本に誇りを。」



靖國神社の聖水・聖水を警備隊碑天山碑へ奉獻